

小さな幸福を電気のおかげ

中学一年 河井 紀乃

「昔は紀乃達かほとんどの会いにきてく水ん
 かつたからさびしかつたでーおばあちゃんに
 「そんなことないっす。けっ、こうよく会いに
 行つたし楽しかつたやんじ
 私の祖母は物忘れが明かつた。だから昔の
 思い出を共有し合つたりすることが難しいこ
 ともあつた。

そこで私は「思い出投影機」のような物が
 あればいいのにと考えた。まず機械を頭につ
 ける。そして私が頭に思い出を思いうかべる。
 そうするとその信号を機械が読みとり、それ
 を映像としてスリーマンに映し出せるのだ。

「あぁー。こんなこともあつたかもしねん
 ーやろ？おばあちゃん、紀乃が会に行く度
 にだっ、しよととて腰が心配やつたわりに
 「ええーとミ遊びに行つておばあちゃんに会
 った直後の映像は、」「ほら」
 「うわっ。映像が変わつた。たしかに、さうい

う映像見てるとやってた気がしてきたわ。そ
れにこの数年腰キツかったかもしれんわ。レ
「やっほり？でもしにくれてうれしかっただ
「そーかー。なら今やってみるかーレ
「やめときやめとき。腰いためる、レ
「そやな。でも紀乃が大きくなってくればよか
った。昔はこんなにな小さかった紀乃か。レ
いつまでたっても話はつきそうにない。
「あー。楽しかった。久しぶりに昔のこと
思い出せたわ。紀乃達とはこんなにいっばい
思い出かあったんわ。ありがとうレ

祖母は昔毎週大阪から私の住む京都に来て
寝付きの悪い私をあやしてくれたり私の世
話をたくさんしてくれた。私はそんな祖母が
笑っている時が一番うれい。

今日でもビデオカメラにはある。しかしそ
こに納められた映像は特別な時のことだけだ。
しかし普段の何気ない会話だっという思い出
だし、その小さな幸福を映像にできる、それ
こそ未来の電気のカダと思う。